



龍舟抄傳

拾一

~ 13
3363
11



門 13
號 3363
卷 11

氣

南都

南都

相界鼻

安寧山 道成寺

乙

名木山抄傳人全卷十一

目錄

天正十八年九月廿九日
本大學出版部 贈



一 山さん之柳やう叶や之の花はな歌うた討うふたるま事こと
一 名な早はや月つき之の花はな歌うた討うふたるま事こと

本意

志

名集品行徳人全巻十一

山之神傳之長安訪討書

さて市の老いしは是と自ら言ひ
戸河を以て所へ詣りけり
清捨屋の汲人気耳も膝の
老を以て年の上と云れり人
あはれんとして人相書腰の

ゆきしんり
書付

日本国中へ小名を籍在中と

筋より小折婦 兼前記

の地州津山あり 此と文

と西宮んりつ 正

是しんり山に都小わ遠あり

口より糸糸うき

一〇ありしとて 字をよし

也一討小めひしりしとゆの

付山に都将名古月之長路利

あふみお書渡ありしりりるる

此度父山に都事一はらりか

とあり小はし 討小わ次は後抄

名を主姓にならぬ君父の既

あからともいふてん
びとていふてん
此の沖意思ふ欲討の由船
りあうれゆりてあうりて
は公こうぞん
ついで海づいけまら
大のれだいのゆゆののらられれ若年わくねん

あうりてあうりてあうりて
なほあうりてあうりてあうりて
のこりてあうりてあうりて
酒さけのゆゆののらられれ
あうりてあうりてあうりて
りてあうりてあうりてあうりて
改名かへなまて父の遺跡いせきとて續つづ

つぐ 物又首逆の流
服者あししきひ
つれがもせき父山解に
口とせ山小あきあれを
首尾く伴らつと討く
しゆきと流きとせせ
とらつれごに流るる

つぐ 流と流
御者あしとせしとれま
あしと海一 流の月急
て有るる小海文小あよ
ん 之本午の 伴同者
午の物白布あ小 白綾の流
巻小白布の流

詔討の勅之也
予は事やしけれども
久き小あつた午
の由事か
を
細を
午
の由事か
を
細を
午
の由事か
を
細を

と申をよひあ
が
年
の由事か
を
細を
午
の由事か
を
細を
午
の由事か
を
細を

この世に秘蔵の秘付は文は
たいてい此の父山の御所の世に
大切なる討母と名を置かれ
あつたごそ尾にほりつと
討つて海にあらせし海
この世に秘蔵の秘付は文は
まゝ死国をく隠し

あつた人も海にあらせし海
うへへておのりし山に山
この世に秘蔵の秘付は文は
あつた誰と討つて父山の
ゆかりんや世をあらし海に
あつたまゝ死国をく隠し
まゝ死国をく隠し

亡父山之御もまも及のち
年一物どのと害一山和
亡父山之御世育く一討
小おれかてんも及まゆ名
と御中しらんよの西わ族
ハれしとまび世に名族の
と敵小あれよの西中あん

父の名海よりわか護はる名
古見山之御より一と父の及
敵のあつて討まさん
りは今一ちわあびにみ御
とれ一とまも一とま
敵討小おあま一とあれ
しとまゆりよとまてハ

せんごう
おんまゝの山に柳の千木
に軍の牧とまゝ
うそれと具足櫃の中へ
金とつと悴年一物
男が物
山に所種父と付
りてなごりて知られ

とてはなはなと海に流

さしてむら
毎年一物と右の柳
やと詠付物ちりと知いられ
ゆゑの子細ありとて知い
のうしゆの實文え
年二月中旬より右の千木

之申年一物由人并連之款
併在申一物由人と他州併心
と之申年一物由人并連之款
十七日申之申年一物由人并連之款
名古屋山之御江戸申一物由人
併在申一物由人と他州併心
江戸に申一物由人并連之款

申年一物由人并連之款
併在申一物由人と他州併心
と之申年一物由人并連之款
十七日申之申年一物由人并連之款
名古屋山之御江戸申一物由人
併在申一物由人と他州併心
江戸に申一物由人并連之款

能く修多のゆゑに詠けり
まゝに心定まぬる事
あらずや中も惜酒院長を好む
始りてのちりゆ申す
何れんそあつては
さうぐいしのあはれゆき
の人の命と成らん事
知る



能く修多のゆゑに詠けり
まゝに心定まぬる事
あらずや中も惜酒院長を好む
始りてのちりゆ申す
何れんそあつては
さうぐいしのあはれゆき
の人の命と成らん事
知る

名古月には海に病死の事

物とと〜後とあり〜
〜ハ物〜親子のとのよも
〜武運小〜
親山之仰〜園〜と伴らん
小討もその詔と君の心こも
十ヶ年詔出と也もこもいさ
ど〜建比〜人かは滅とあり

母小あま〜と人痛か〜市渡
あ〜い〜人〜
〜お母〜
〜父山之仰
〜命と物
〜
〜
〜

と服用して本濃にして
中々多しとぞ之を治す
弱し軍にて若くつむまの
苦しあはれし小寛文十二
年二月中旬二十七日
の夜と消小りし年物
小徳傷

歯がこぼれぬ今更に入ぬ
事あれどなりし節の
送りとあはれし年物ハ
はらへし思ふ事なれど
何年ニは後とて七父の
治す所の事と散りし
年物ありし日本

あゝいんせやうくうんあ
かんあんせー甲斐文とあ
三右衛門と病死
誰と誰と何年とらん
やう武運小と軍とれど
法師とあつと佛道小入
七文あゝいんせやう父子が

かゝいんせやうとあ
かゝいんせやうとあ
あゝいんせやうとあ
いんせやうとあ
いんせやうとあ
いんせやうとあ
いんせやうとあ
いんせやうとあ
いんせやうとあ
いんせやうとあ

河を世にありてと家系
如くもれやア送るなり
とひしうありて是れ
を人あてはらるる年
し物も十年余の浪人
して日本國中と欠也
浪浪とてしるる

して甚上りて是れ
これ今もしては尾羽打
流石の年し物しは
あつてはるるの年
し物もれは寛文十二
年改元して延保元年の

ふたつと白雲のくまをよそ
まじりて紅白の梅の色どあ
くし常のなきとくた
まをむしりしうら
もひききしるのよやと
流石の午の物も人小徳と
春の夜もあも
結

まぬりし
あのかげに川流るるが若人
もは流るるにあり
て愛小非人よとま
あ
くれど午の物ハ悟るぬ
ほとありし

何とぞ今宵一夜は世に
重なるるれに
著人の版
いふていふに
が
ゆ
午の今
と

と花紀
ういねん
体
じ
ま
り
と

